1

営業部全体の、今月分の勤務表をチェックし終えたとき、うしろからポンと肩を叩かれた。
「お疲れさま！」
振り返ると、田島瑛子が笑顔で立っていた。いつもながら、健康的に日焼けしている。そういえば、先週末に沖縄へ行ってきたと言ってたっけ。
理恵子は、南国の海に行ったところで、こんなふうにきれいに日焼けすることはできない。ヒリヒリ赤くなるだけだ。羨ましい。
「どしたの？　もう終業だよ」
理恵子はあわてて目をしばたたき、壁の時計を確認した。五時十分過ぎだ。

理恵子にはよくこんなことがある。何かというと、どうでもいいようなことばかり、頭のなかでぐるぐる考えてしまって、話しかけられているのに返事が遅くなったり、トンチンカンなことを言ったりしてしまうのだ。
瑛子はそれが面白いという。理恵ちゃんはホントの天然ボケだという。ピントがズレてるけど、そこが魅力なのだという。からかっているのではなく、どうやら本気らしい。理恵ちゃんて、頼りなげで可愛くて、放っておけないところがあるのよね。
瑛子は四年制大卒で、一年留年もしているので、年齢は理恵子より三つ上である。そのせいか、同期入社ではあっても落ち着きが違う。理恵子にとっては、友人であると同時に頼りになるお姉さんのような存在でもある。
筋肉質の引き締まった身体を軽快に動かして、瑛子は理恵子の隣の回転椅子に腰かけた。
「ね、今夜さ、また合コンするの。理恵ちゃんも来るでしょ？」
親しげに顔を寄せると、
「城野さんがね、また理恵ちゃんに会いたいんだって。だって合コンの誘いをかけたら、真っ先きにこう訊いたのよ！　村野さんも来るのって」
理恵子が何ともリアクションできずにいるうちに、「やるじゃないの」と、瑛子は理恵子を突っついた。「じゃ、ＯＫよね？　前回と同じ、女の子は会費三千円よ」
「わたし――」
「引っ込み思案はナシ。ハナの金曜日なんだからね。真っ直ぐ家に帰るなんてのはナシ」

「う、うん」
「じゃ、きまり」瑛子は回転椅子が半周するほどの勢いで立ち上がった。「七時半からだからね。この前と同じに、〝シャボン〟で待ち合わせましょ」
「でも、わたし」理恵子はようやくちゃんと声を出して、瑛子を引き止めた。「今日はちゃんとした格好してこなかった。ジーンズはいてきちゃったの」
「上は？　Tシャツ？」
「ううん、綿のシャツ。ギンガムチェックの。足元はスニーカーだし」
瑛子は椅子の背もたれにつかまって笑い転げた。
「理恵ちゃんらしいなあ。学生さんみたいよ。清潔でいいんじゃない」
ちょっとかがむと声をひそめ、
「でも、気になるならさ、お給料日の後だし、デパートへ寄ったら？　時間はあるもの。松屋でもコアでもサマーセールやってるわよ。あたしも付き合えるといいんだけど、これから予約とか手配しなくちゃならないし」
「そう」理恵子はうんうんとうなずいて、また微笑んだ。「それじゃそうしてみる。足元だけでも変えればいいかな？」
「そうね。ミュールにすれば格好がつくわよ。ジーンズに合うやつを、店員さんに見立ててもらったら？」
うん、わかったと応じると、瑛子は元気よく手を振って人事局を出ていった。ここでは残業はほとんどない。男性社員たちも帰り支度を始めている。戸口のところで、瑛子はそのうちの誰かに声をかけられ、笑顔でひと言ふた言応じると、「お先に失礼しまぁす」と挨拶して廊下に消えた。
瑛子の所属している営業一課は、理恵子が勤めるこの人事局とはフロアが違う。だが、営業補佐として働く彼女は、多忙な営業部員たちに代わり、しょっちゅうここに出入りしている。だから顔馴染みなのだ。理恵子も、それで友達になる機会があった。
今年、人事局に配属された新入社員は三人いるが、女性は理恵子ただ一人である。比率としては女性社員の方が多い部署なのだが、みんな理恵子よりずっと年長で、結婚し子供もいるようなベテランばかりだ。幸い親切にはしてもらえるけれど、なかなか話が合わない。瑛子と知り合うことがなければ、ずいぶんと淋しいままだったことだろう。六月の新入社員研修旅行でも、瑛子がいてくれたからとても心強く、楽しむことができたのだった。
チェックの済んだところにマーキングし、手順正しく勤務票確認計算プログラムをシャットアウトする。理恵子がその作業をしているあいだにも、人事局の社員たちが「お疲れさま」「お先に」と声をかけあって、牢獄から解放されたみたいな顔をして職場を離れてゆく。今週の仕事はこれで終わりだ。土日には何をしよう？　片付けなければならない家事は何があったっけ？　忙しそうなのに、みんな楽しそうだ。
理恵子はほっとため息をついた。更衣室も化粧室も混んでるだろうな。十分ぐらいずらして行こうっと。

――城野さん。
総合企画部の一年先輩だ。四大卒だから、年齢は理恵子よりも三つ上だ。たぶん。前回初めて会ったとき、大学には現役で合格したし、留年もしていないって言ってたから。
――わたしに気があるんだって。
そんなこと、あるわけがない。だって女子社員にすごく人気のある人なのに。わたしのこと知ってて、探りを入れてるだけなんじゃないのかな。
理恵子の働くこの大昭和電工株式会社は、業界では上から三番目くらいの位置にある。最大手ではないが、充分に大手だ。本社は大阪にあり、ここは東京本部と呼ばれている。建物の構えは大阪本社の方が大きく、そこで働く社員数も多いが、施設や備品は東京本部の方が新しく、進んでいる。一昨年建て替えたばかりだからだ。会社案内に載っていた写真そのままの、洒落て機能的なオフィスの一角に、理恵子の机もある。
内定がとれたとき、両親はたいそう喜んだ。今日日、一般職でさえ、短大卒の女の子が新卒で大企業に採用されるなど、ほとんど奇跡だ。理恵子ももちろん嬉しかったけれど、この奇跡にはカラクリがある。理恵子の伯父、父親のいちばん上の兄が、大阪本社でかなり上のポストについているのである。つまりはコネ入社だ。
――ここだけの話だけど、四大卒の女の子は使いにくくてしょうがないんだよ。プライドが高くて、理屈ばっかり言うからな。そのくせ、歳はいってるからさ、すぐ寿退社しちゃうだろう。だから理恵ちゃん、ちっとも遠慮することなんかないんだよ。俺は常々、短大卒の女の子の採用

枠を増やせと主張してきたんだからね。今回は、その意見が採り入れられたわけでさ。
――だけどまあ、最低でも二十五になるまでは働いてくれよな。会社もさ、最初の三年ぐらいは、社員を働かせるというよりは、教育するだけで精一杯なんだ。戦力になるのは四年目からだからな。
そう言って、伯父さんは理恵子の肩を叩いた。ちょうどさっきの瑛子のように。自分に自信を持っている人は、なぜかしら他人の肩を叩きたがる。そうすることで、ホラ、私は親しげにあなたに触れてあげたでしょ、私はあなたを認めているんですよと、相手に報せているつもりなのだろうか。
伯父さんが何と言いつくろってくれようと、縁故入社は縁故入社だ。前回の合コンのときだって、来た人はみんな、それを知っていた。城野さんも知っていた。田島さんはもちろんだ。もしかしたら、彼女がわたしに親切にしてくれるのも、わたしの友達でいたがるのも、わたしの後ろに伯父さんの顔がテラチラしているからじゃないのかしら――
嫌だ嫌だ、また益体もないことを考えている。ぐらぐらとかぶりを振りそうになって、理恵子は意志の力でそれを停めた。もう、このみっともないクセはやめるって約束したんだ。やめられるはずだって、教えてもらったんだもの。
あの人たちに。
席を立ち、人事局を出た。大きなキャンバス地のカートを引いて、清掃作業員が入室してくるのとすれ違う。ご苦労さまですと声をかけたけれど、返事はかえってこなかった。

廊下に出てちょっと歩き、角を曲がると、壁の片面に男性社員たちのロッカーが並んでいる。理恵子の心は思い出の中へとさまよい出る。わたし、あのなかに隠れていたんだ。風船頭の人間モドキたちが怖くって、息をひそめて縮こまっていたんだ。

そしたら、助けに来てくれた。

D・B（ドリーム・バスター）。わたしの賞金稼ぎさんたち。

夢のなかのお話だ。そう、夢だ。この世界で起こったことじゃない。

だけど、あの人たちのことを思い出すと、胸が温かくなる。この温かさは特別だ。他（ほか）のどんな人にも感じることがない。他のどんな人からも与えられたことがない。これから先もずっと。たぶん。いえ絶対に。

更衣室はやっぱり混んでいた。押し合いへし合いのやかましいなかで着替えをし、汗びっしょりになって、理恵子はエレベーターに乗り込んだ。

満員だったけれど、幸い、面識のある社員が乗り合わせてはいない。理恵子は箱の隅（すみ）でちぢこまった。上等な背広やお洒落なスーツの林のなかに紛（まぎ）れ込んだ、痩（や）せっぽちの小さな異分子。コロンとヘアスタイリング剤の匂いが入り混じって、鼻をくすぐる。

理恵子は、そっとエレベーターの天井を盗み見た。四角い樹脂板を幾何学（きかがく）模様に組み合わせて作られた天井から、蛍光灯（けいこうとう）の白い光が降り注（そそ）いでいる。

――わたし、あの上にあがったんだ。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。